

国立国語研究所学術情報リポジトリ

What does a metaphor mean and perform?

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 巧, SUGIMOTO, Takumi メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/00002128 |

隠喩の意味することと行うこと

杉本 巧

(広島大学)

キーワード

隠喩, コミュニケーション, 字義, 規則, 合意

要 旨

「男は狼である」のような隠喩が表しているのはどのような「意味」か、その意味の導出手順についての議論は未だに決着を見ていない。それは、共有された規則に従った解釈を前提とする先行研究が、隠喩が表す確定的な「特別な」意味の存在を仮定し、その内容や解釈手順の解明に固執していることによる。Donald Davidson の発話への意味付与及び発話解釈についての素描を基にすれば、隠喩はその場で形成される解釈理論に従って字義通りに意味することを意味する。そして、表す意味の点では特別と言えない隠喩について問題となるのは、その発話で何をなすのか、すなわち隠喩による行為である。隠喩の最も基本的な機能はXをYと見なすよう仕向けることである。また、字義通りに解釈されることによって生じる隠喩の機能が隠喩と直喩との違いの基になっている。そして、会話において参与者相互で隠喩を用いる場合、隠喩の解釈理論の調整・検証が行われ、その場での字義を与える言語理論が形成される。

1. はじめに

表現技法としての隠喩は、ギリシア時代のキケロによる分類では、説得的な話術の体系である弁論術の修辞部門に位置づけられており、その「人を動かす力」が紀元前の時代から関心の対象となっていたことが窺われる。

20世紀後半以降、「言語」の科学的な解明へと向かう多くの研究は、隠喩に関する中心的な主題として隠喩表現の意味と解釈過程についての研究成果を積み上げてきた。「XはYである」¹ (例えば「男は狼である」) という隠喩表現を分析対象として、それがどのような「意味」を表しているのか、その意味はどのような解釈過程を経て導き出されるのかなどについて議論が続けられてきた。しかし、その議論は未だに決着を見ていない。

そのような混乱の原因は、隠喩の解釈規則の存在を前提していること、隠喩が表すとされる「特別な」意味の科学的な解明に固執していることにあると考えられる。そこで本稿では、まず規則の共有を前提とした言語・コミュニケーション観に基づく隠喩論を批判する。そして Donald Davidson の隠喩と相互理解についての論述を参考にしながら、隠喩論の混乱の元となっている「意味」観からの脱却を図り、言語活動における隠喩の機能を明らかにする。その機能は、隠喩と直喩との違い、さらには、日常的な談話における隠喩の使用にも反映されている。

2. 規則論とコミュニケーション

2.1. 規則について

アリストテレスは『弁論術』と『詩学』それぞれで隠喩を扱った。隠喩の弁論における機能と詩的機能とが認識されていたということである。そして、法廷や議会などで使われる弁論のための技術を体系化した弁論術で扱われるということは、説得における「力」が認識されていたことを意味する。

しかし、時代を経て弁論（及び説得）から離れた修辞学は、言述を飾り立てるための技術として扱われるようになり、修辞技法全般を認識を曇らせて真実を覆い隠す技法と見なす立場もあった。Perelman(1977)は、既に聴衆を動かす得ない文彩を「文体的文彩」と呼び、「文彩〔論型〕は具体的状況から切り離され、植物標本の中の色あせた花の如く扱われる時、その動的な役割を見失われて単なる文体的文彩になり終わる」（邦訳:18）と述べている。

「新」修辞学の先駆けとも言える Richards(1936)は、隠喩の意味と対置されるような「本来の意味(proper meaning)」観を批判し、隠喩は表現上だけでの問題ではなく「《思想》相互間の借用、交換であり、脈絡間の取引」であり「隠喩においては、異なる事物に関するふたつの思想があい共に活動し、かつそれは1語または1句によって表現される。そして、その語や句の意味はふたつの思想の相互作用の結果である」（邦訳:87）と述べ、隠喩をいわゆるコンテキストに位置づけて扱うことの重要性を指摘した。にもかかわらず現在に至るまでの多くの隠喩研究は文レベルでの意味論的な操作の説明に終始しているように思われる。それは、隠喩と一対一の関係にある「隠喩の意味」があることを前提として、その内容及びその内容を導く過程に固執しているからである

例えば、Searle(1979)は、発話行為論の枠組において「隠喩の仕組みを説明する、という問題は、話者の表意と文または語の意味とがいかにして分かれてくるかを説明する、という一般的な問題の一つの特殊ケースである」（邦訳:83）として、隠喩の字義通りの意味とは別の、「話者の意図」（同上:84）が存在することを前提として議論を展開している。そこでは聞き手のすべきことは、話し手の意図の「再現」であることになる。その背景にあるのは、「隠喩には、作者が伝達しようとする意図している確定した認知的内容が結びついており、解釈者が隠喩のメッセージに到達するという場合、彼はこの内容を把握していなくてはならない」（森本 1987:97）という意味の了解についての態度である。

隠喩の意味や解釈過程の規則化を目指す研究では、例えば「男は狼である」という隠喩について「男は獠猛である」等の意味を表しているといったように暫定的な解釈を設定し、その解釈を導き出す手順の一般化、すなわち隠喩の解釈規則の同定を目指す。例えば、言語学の立場では、「選択制限違反」(Chomsky 1965)によって隠喩を説明しようとする試みがある。

- (1) a. 俊夫はコンピュータだ。
- b. 俊夫は狼だ。

aの文においては、コンピュータは生物ではなく（[-生物]という属性をもつ）、生物である（[+生物]という属性をもつ）俊夫とは明らかに異なる階層のカテゴリに属しているという点で

「不一致」が見出される。bでも俊夫が[+人間]であるのに対して狼が[-人間]で不一致がある。このような意義素分析を基にした不一致は「選択制限違反」と呼ばれる。山梨(1988)はこの選択制限違反の認定が隠喩の解釈に重要な影響を与えているとしている。山梨は語の意味内容は、中核概念(その表現の指示対象を生物学的に特徴づける部分)と顕現特性(その表現の指示対象のプロトタイプを特徴づける部分)とに大別されるとして、隠喩の解釈は選択制限違反が認められた後、Yの中核概念がXの中核概念によって再構成され、Yの顕現特性がXの中核概念に転写されることが基本であるとする。つまりはYの顕現特性のうちのいくつか(例えば狼であれば「獠猛さ」や「狡猾さ」)の要素をXの意味内容に付け加えるということである。だが、そのような操作や導き出された解釈は(「俊夫は獠猛・狡猾である」等々)、どのような根拠によって「正しい」解釈だと言えるのだろうか。意味論的に元の隠喩文と導き出された文は等価であると言えるのだろうか。

言語現象を科学的に捕らえようとする言語研究で仮設されている言語理論は、「まったく等質的な言語社会における理想上の話者・聴者を対象として扱うもの」(Chomsky 1965, 邦訳: 3)である。言語データは具体的な場面から離れており、最大公約数的に構築されてきた言語体系に照らして「正しい」言語しか対象にしていない。

しかし、滝浦(1988:10)が述べるように、言語の科学で設定されている言語規則は、実際には「現実に語られている、あるいは語られてきた言葉の形式的記述」であり、それゆえ「まだ語られなかった言語の記述でもなければ、そのような言語の可能性をあらかじめ封ずるもの」でもない。

実際にことばを使うのは、常に他者との相互行為においてである。実際の会話では、たとえ参与者の発言が文法的に「違法」であったり、言い間違いが発話に含まれていたとしても、他の参与者はそれらを寛容に受け入れ、コミュニケーションを成立させている。言い間違いをして、それでも話し手の意図が通じているような場合、通じているのはその言い間違いを含む表現の一つの「解釈」である。つまり、実際のコミュニケーションの場面では、ある表現が文法に違反していることとその表現が関係するコンテキストにおいて解釈されることは異なる問題であり、規則はその場面ごとに適用される言語の現れ方を決定づけることはできないのである。

そして、解釈とは一過性の出来事である。日常の生活において、ある言葉は数えきれない場面・目的において用いられるし、その意味では使い方は無限である。したがって、たとえ語が標準の意味をもつと仮定されたとしても、その語の全ての使い方を事前に分かっていることはできない。ただ、それは言語の使用に不都合を生じさせるのではなく、記号を一般的に共用することができる理由でもある。ある語が正確に同一の対象にしか言及することが出来ないならば、我々が様々な場面でその語を使用することはできない。語の使用法の不確定性は、記号の本性である(滝浦 1988)。新しい場面の中での使用は、聞き手がこれまで全く経験したことの無い用法であるかもしれず、隠喩の使用もその一つであると言える。

2.2. 規則と隠喩

認知科学の発展と並行して、近年の隠喩研究では隠喩の解釈モデルの構築に多くの努力が払われてきた。しかし、それらの研究では、例えば「男は狼である」という隠喩表現を分析対象として、隠喩を言い換えることは隠喩独自の「認知的内容(cognitive content)」(Black 1962)を失うとして、その具体的な内容は曖昧にしたまま解釈過程を一般化しようとする。一般に表現の意味を記述するには他の言葉を用いるしか方法はなく、隠喩の完全な言い換えが不可能であることを主張するならば隠喩の意味の完全な記述は不可能である。あるいは先に山梨(1988)を例として挙げたように「男は獠猛である」等の意味を表しているといったように暫定的な解釈を設定し、その解釈を導き出す手順を一般化しようと試みる研究も多い。

これらの研究では、記号とその解釈の一対一の関係を前提にしたコミュニケーションモデルを仮定している。そして、隠喩は、言語学で想定されている意味論規則と照らし合わせれば明らかに規則違反である。そのような隠喩も、言語表現の一種でありコミュニケーションで用いられている以上、隠喩でない表現と同様に一義的な解釈が決定されるべきであるという前提をもつ。そして、そのような立場が抱える最も大きな問題は、いかなる解釈過程の説明も、正しい答え、すなわち解釈結果を同定しておかなければ、正しいとも間違いだとも言えないという点にある。

では、そもそも隠喩の意味といわれるものを同定することは可能なのだろうか。先にも触れたように、言語規則はある言語において適切に用いられ得る文の分析を通して抽出されるが、その適切さは当然のことながらコミュニケーションの場で用いられ、それが社会的な相互行為において評価され受け入れられてきたということによる。言語規則はあくまでも社会において人間がコミュニケーションのために用いてきた言葉の使い方から抽出されているのである。つまり、ある文は相互行為の中で用いられることによって実際的な解釈がなされ、その文脈の中で使用された時になされる共同体の判断が、適切な使用の基準である。そこでは先にも述べたようにそれまでの使い方とは異なる使い方が生まれたり、隠喩を一例とする規則違反の発話が生まれることも全く不自然ではない。なぜ隠喩の解釈の同定が困難であるかと言えば、それが社会における相互行為の現場でのみつくられるからである。

Davidson は規則・規約の共有を前提としたコミュニケーションにおける相互理解を批判し、規則・規約の共有に依らない意味論と発話解釈の仕組みを提案している。本研究では、現実のコミュニケーションにおける言語使用は、上述した先行研究で想定されているような規則に完全に支配されているのではない点を重視し、以降 Davidson の隠喩及び言語によるコミュニケーションにおける相互理解に関する主張を足掛かりとして、コミュニケーションにおける言語使用の観点から考察を進める。

3. 隠喩の意味と機能

3.1. Davidson の隠喩論

Davidson(1978)は、隠喩は「諸々の語が、その最も字義に忠実な解釈において意味するところのものを意味するのであり、それ以上のいかなるものをも意味するものではない」(邦訳:49)と述べている。そして「字義上の意義あるいは意味に加えて、さらにもう一つの意義あるいは意

味を持っているという考え」(同上:50)を多くの隠喩論が陥っている誤った考えであると批判した。

現在まで続く隠喩論の潮流においては極端な主張にも思えるが、その論述の冒頭で「隠喩を理解することもまた、隠喩を創作することと共に、創造的試みであり、加えて、ほとんど法則らしきものに導かれることもない」(同上:49)と述べていることに注意が必要である。また、Davidsonは「語が意味するところのもの」と「語がそれを行うために使用されるところのもの」とを区別し、隠喩は「全面的に使用の領域に属する」(同上:51)と述べ、何を意味しているか何のために使われるかということの区別の重要性を指摘している。

隠喩が「字義通り」であるという Davidson の主張は、特に「字義」や実際のコミュニケーションにおける発話への意味付与について「非還元論的な特性描写」(森本 1987:92)を行った Davidson の後年の論述を考慮に入れることによって現代の隠喩論に大きく寄与するものとなる。以下では、まずその意味理論を概観する。

語の意味としてその内包を記述しようとすれば、さらに別の語を積み重ねるだけであり、無限後退に陥ることは意味論における多くの議論が示している。また、ある語の意味はその語が指す具体的な事物や状況あるいは概念であるという意味の指示説も実際には指示対象が状況依存적であり確定され得ないという点で批判される。

意味に依存しない意味理論として Davidson が提案するのは真理条件的意味論である。それによれば、ある文 s に意味を与えるということは、その文 s が真になる条件(真理条件)を探し出すことである。それは具体的には「 s が真なのは、 p の場合その場合に限る」(Davidson 1984, 邦訳:14)という文を完成させることである。言い換えれば、ある言語における文の意味を理解しようとするとき、その文が真となるのはどのような状況 p の下であるのかを探るのである。この文の真理条件の探求は「根元的解釈(radical interpretation)」²と呼ばれる。そして、この根元的解釈はどのような文を理解するときにも行われる。

また、Davidson は言語の意味について全体論の立場をとる。全体論とは、「個々の語や文は言語体系全体のコンテキストの中でのみ意味をもち理解しうる」とし、したがって、「個々の語や文の意味の変化は言語体系全体の変化と連動する」と考える立場である(廣松他編 1998:1501)。したがって、意味の全体論は、発話の解釈に際して解釈者は対象となる言語全体の解釈理論を既に選んでいることを含意する。加えて Davidson は根元的解釈をする者は、話し手の言語全体のみならず信念や欲求などの全体をも知っていなければ発話を理解することは出来ないとする。

だが、意味の全体論に従うならば、実際のコミュニケーションにおいて、どのような信念や欲求を持っているかを部分的にはあっても知らない相手の発話を解釈することは出来ないことになる。そこで必要になるのが寛容の原則(principle of charity)である。

戸田山(2002)のまとめによれば、寛容の原則とは以下のようなものである。

われわれが解釈を試みている人が信じていることがらは、だいたいにおいて、われわれ自身が正しいと信じていることがらであると仮定せよ。言い換えれば、解釈の対象となる人が正

しいと思っていることが最大限その人を取りまく状況と合致するように解釈せよ。

(戸田山 2002:110)

例えば、実際にその場で雨が降っているときには、相手も雨が降っているという信念を抱いていると見なす。解釈に際して解釈者は発話者が自分と同じ程度に合理的であり整合性のある信念や欲求を抱いているものと見なして根元的解釈に臨むということである。

だが、一方的に自らの信念体系を相手に適用するだけでは発話の理解が一致しないであろうことは容易に推測される。その問題を解消するために、Davidson(1986)は寛容の原則を適用した根元的解釈における意味付与のための「理論」として、「事前理論(prior theory)」と「経過理論(passing theory)」を導入する。

聞き手にとっては、事前理論は「聞き手が話し手の発話を解釈するために前もってどんな準備をしているかを表現」し、経過理論は「聞き手が実際に発話を解釈する仕方」である。話し手にとっては、事前理論は「話し手が解釈者の事前理論がそのようなものだと信じている理論」であり、経過理論は「聞き手が用いることを話し手が意図している理論」(以上「」内 Davidson 1986: 442, 引用者訳)である。聞き手はその時々々の場面で発話を解釈するために経過理論を形成し、根元的解釈を行い、発話に意味を与えるのである。

そしてコミュニケーションのために共有されなければならないのは、前もって獲得された言語知識を含む事前理論ではなく経過理論である。その経過理論が一致するとき、合意と理解の漸近線に達するが、それは特定の名称のリストや語彙の改変等を含むだけでなく、どれほど通常の使用からかけ離れたものであってもうまくいった(正常に解釈された)語や句の使用法を含んでいる。そして意味の全体論に従うのであれば、その理論はその発話を含む言語全体に意味を与える理論として形成される。森本(1989:135)によれば、経過理論は「いかに東の間の心許ない見取図であれ、それは一定の意味連関を布置する「理論」である。つまりその時々々の発話は経過理論によって意味を与えられるのである。したがって、その語や句の意味は、一時的なものかも知れないが、「字義的」である。

そのようなコミュニケーションに臨む参加者が必要とするのは、「発話から発話までの経過理論において収束する能力」であり、「言語的技能を獲得した方法と同様、彼らの出発点は非常に異なる」ため、「同様に収束を達成する方略や計略は異なる」(「」内 Davidson 1986:445, 引用者訳)と考えられる。したがって、経過理論に達する一般的な規則はないということになる。

Davidsonの論述の中で、本研究にとって重要な示唆は、発話の解釈において共有された規則の存在を前提とせず、標準的な使用から外れている発話にも正当な意味を与える基盤を示唆している点である。先にも述べたように実際の言語活動においては参加者がこれまでに使ったものとは異なる「理論」を必要とする可能性が常にあり、「寛容の名において理論を修正する心構え」(Evnine 1991, 邦訳:239)が必要となる。

もちろん、同じ言語(「日本語」など)を用い、同じ文化に属する者同士の「事前理論」は相対的に見て似通っているだろう。だが、それは決して同じであることを意味しない。隠喩を含む

個々の言い回しや言い間違い、助詞の取り違えなど「逸脱的な」使用は、日常的に頻繁に出現する。現前している場面で相手がどれほど通常とかけ離れた使用をしていても、そこに合理性が認められる限りにおいては正当な使用として意味を与えようとするのである。

発話に意味を付与する「理論」がその場で調整されるしかないのであれば、たとえ言語の科学が、既に成立したコミュニケーションで使用される語や文についてはかなりの部分を説明することが出来るとしても、そのことによって規則のみがコミュニケーションを成り立たせているという理由にはならない。Davidson(1984)は次のように述べる。

言語における社会の役割は、容易に誤解される。言語は、確かに、社会的な業である。しかし、社会がいかに言語慣習を公共的規範に従わせているかということに気付いたとき、われわれが言語的コミュニケーションの核心を深くまで見抜いたと思うのは誤りである。言語について規約的なものがあるとすれば、それは、隣人たちが話すのと同じように人々が話す傾向にある、という点である。

(Davidson 1984, 邦訳:316)

コミュニケーションという相互行為において最も重要なのは、それが成功裡に終わることである。2で述べた立場では、共有された規則があり、それに従って言葉のやりとりが行われなければコミュニケーションが成功しないという前提がある。しかし、実際のコミュニケーションにおいては、全く経験したことの無い表現方法が用いられたり、言い間違いや標準的で無い言い回しがしばしば現れる。それでも大抵のコミュニケーションは成功裡に終わる。コミュニケーションが常に成功することから、言語規則が共有されており、その規則が発話（及びその解釈）を導くという言語観が抱かれ、ある文化的共同体の成員は同じ「言語」の使い方を既に知っているとは仮定されるかもしれないが、むしろ他者は自分とは異なる言語や信念の体系を持っていると考える方が自然である。

そのような他者とのコミュニケーションの成功にとって最も必要なのは、お互いに満足できる程度の相互理解に達することである。そして、個々の発話の理解は話し手・聞き手双方においてコミュニケーションの成功にとって必要な程度に似通っていればよく、それが満たされるならば個々の発話は規則に従っていてもいなくてもよい。言い換えれば、コミュニケーションが成功するならば、規則は全く共有されていなくても目的は達成されたといえるのである。この点について Davidson(1984)は「言語的コミュニケーションは、規則に支配された反復を、極めて頻繁に利用するにも関わらず、要求はしない」(邦訳:318)と述べる。

Ricoeur(1972)が述べているように、「すべての言述は一つの出来事として生まれ」、「一過性の存在をもつ」(邦訳:87)。言語が使われることによって参与者間に起こる出来事が解釈である。実際的なコミュニケーションにおいて自身の「理論」をそのまま使うことができるかどうかを場当たりの確かめなければならず、臨機応変のやり方の結果としてコミュニケーションの成功を得てはじめて、我々は既存の理論（「事前理論」）がどの程度有用だったかがわかるということに

なるのである。そして、その場面に利用するのに適当な「規則」を既に有していたとしても、コミュニケーションが成功したとき初めて、そのコミュニケーションが規則に「従っていた」と言われうるのである。

そして、隠喩こそ正に以上のようなコミュニケーションの仕組みを考慮に入れた扱いが有効な対象ではないだろうか。言語規則があるとしても、それに違反していることが明らかなのだから、前もって規則的に解釈を予測できるような対象ではなく、あくまでもその場で「つくられる」しかないという点が、従来の隠喩論の規則の存在を前提とした特性描写では欠けているのである。

以上の意味理論を採用するならば、隠喩が字義通りであるというのは、言語科学が想定するような規則に従って静的・辞書的な意味しか表さないということではなく、その場で形成される発話の解釈理論に従って字義通りのことを意味するということである。「彼は狼だ」という隠喩の文の意味は、「(話し手の言語においては)「彼は狼だ」が真なのは、pの場合その場合に限る」を満たす真理条件を探し出すことで与えられる。そして、その点で隠喩以外の表現と意味論的な違いはない。

3.2. 隠喩の機能

以上の立場に立つならば、隠喩に関する興味深い問題は、それが表す意味ではなく、通常の用法からは逸脱しているように見える文によって行われることである。隠喩に字義通りの意味を与えさせることが本研究の関心の対象となる隠喩の最も基本的な機能につながる。

「XはYである」という隠喩に字義通りの意味を与えるのは、どのような解釈理論だろうか。「XはYである」という発話を受け取った聞き手がすべきことは、「XはYである」が真になるような真理条件を探すことである。例えば「太郎は学生である」が真であるのは、実際に太郎が学生であるときだけである。だが、自分と同じ程度に合理的である話し手であれば、狼でないことが明白な人間の彼を狼であると信じていることはあり得ない。しかし、実際に話し手は「彼は狼である」といっているのだから、寛容の原則に従う解釈者にとってその発話を真としうるのは、何らかの合理的な理由で話し手がXをYと見なしている場合に限られる。そして、聞き手は「XはYである」が真になるように、XをYと見なすような解釈理論を形成するのである。この「見なす」が「信じる」とは異なることに注意しなければならない。

以上のように字義通りの意味の付与のために真理条件を探させ、XをYと見なすような解釈理論をつくらせること、言い換えれば、聞き手がXをYと見なすよう仕向けることが隠喩の最も基本的な機能である。Davidson(1978)は「何々として見る(seeing as)」と「何々を見る(seeing that)」とを区別し、隠喩は「我々に一つのことを他のものとしてみるよう導く」(邦訳:66)と述べる。

このような隠喩の機能は、その発話に込められた話し手の意図に必ずしも顕在的に含まれているものではない。例えば、しばしば言われるように隠喩は説得(彼は狼だから一緒にドライブに行かない方がいい)に用いられうる。隠喩を用いることにより、発話により説得力を持たせる

(例えば「より危険性を感じさせる」など) ことができるならば、それは当該の対象を別のものとして見させる (彼を狼として見させる) ことを前提として生まれる効果である。また、質問 (彼は狼だろうか)、要請 (狐ではなく虎になって欲しい)、または皮肉などのために使われうる。単に冗談として相手を笑わせることにつながる場合もあろう。これらの言語を用いた行為は、XをYと見なすよう仕向けるという隠喩の機能を前提として遂行される。つまり、隠喩を用いてXをYと見なすよう仕向けることがその後の言語活動において何ごとかを「なす」ことにつながるのである。

3.3. 隠喩の「標識」

Davidson の論述を基にしたコミュニケーションにおける相互理解において発話の字義通りの意味を与える仕組みから見れば、隠喩と隠喩でない表現との間に違いはない。つまり、表現と一対一の関係があるような「意味」があり、それが特別であるということが隠喩を特別な表現とみなす理由であるとは言えない。

以上の議論では、隠喩と「太郎は学生だ」のようないわゆる普通の表現との違いは明確でない。だが大抵の場合、言語活動において隠喩が発話されればそれが隠喩であると同定することが出来る。

隠喩であることを気付かせる最も顕著な「標識」は、XとYとが経験的に異なる分類をなされているという関係である³。例えば人間である彼は人間ではない狼と同じではあり得ないことは明白である。彼をXと一般化した形で示せば、隠喩はXが明らかにXでないもの(狼)と同じであると明言しているのであり、既存の分類を無視した同定がなされている。Handelman (1982)が指摘しているように、隠喩の特性は「それが〈……である〉の内部に〈……でない〉を保持している点」(邦訳:56)に見られる。この点については、同様の感覚が包含関係に基づく提喩(「人はパンのみにて生きるにあらず」の「パン」が食物全般を指す)には感じられないことと対照をなす。もちろんパンは食物でもありうる。

話し手にとってもその発話によって自分が本当に「彼が狼である」ことを信じていると受け取られる心配はない。Davidson (1978)は「隠喩文の中の不合理や矛盾は、我々がその文を信じないための保証を与えてくれているのであり、また適当な状況において、我々がその文を隠喩と取るように誘導してくれもする」(邦訳:61)と述べる。

隠喩ではXとYについての経験的な分類が齟齬を来している。だがこれだけでは言い間違いとの区別が明確にならない。ここにDavidsonの経過理論による理論の組み換えを考慮に入れる必要がある。

人間の「彼」を「狼」と呼ぶのならば、標準的な用法では彼が人間であることと狼が人間ではないことが不整合を起こす。その不整合を解消するような理論の組み替えが必要となる。寛容の原則に従う聞き手は、それまで経験してきた通常の用法に照らせば明らかに矛盾を抱えているにもかかわらず、コンテクストと整合性を持つような字義的意味を与えようと試みる。それは彼を狼と見なす理論をつくることによって可能となる。それによって「彼は狼である」に話し手の

抱いているであろう信念や欲求に鑑みて合理的・整合的な意味を与えることができるのであれば発話を理解することができる。それに対してある発話が言い間違いとして受け取られるのは、間違いであると判断する方が話し手の抱いているであろう信念や欲求に鑑みて合理的・整合的であると判断がなされる場合である。

つまり、隠喩が形式を同じくするその他の表現方法と異なる感覚を伴って受け取られるのは、「XはYである」が、経験的な分類に照らせば話し手にとっても聞き手にとっても明白な矛盾〈XはYではない〉を抱えているにもかかわらず、経過理論の形成によって合理性を満たす意味を与えられることによるのである。

4. 隠喩という行為

4.1. 隠喩による「呼び起こし」

ここまでで Davidson の議論に依拠し、隠喩は字義通りのことを意味すると述べた。だが、経験的に隠喩が用いられているコミュニケーションで我々が理解しているのは字義だけではないようにも思える。Davidson 自身も隠喩が何らかの「効果」をもつことまでも否定しているわけではない。だがそれは先行研究が追究していた「隠喩的意味」とは呼べない。

例えば「犬はほ乳類である」のような表現を聞き手が解釈する際に〈犬は胎生である〉や〈犬は足が四本ある〉という思考を抱いたとしても、それは最初の「犬はほ乳類である」という表現の意味とは言えない。一般に「XはYである」という発話を受け取って、Yについての知識を用いてXについて推論することは頻繁にあるが、推論で得た思考が表現と一対一の関係にあるような「意味」とは言い難い。このような、表現とその表現を起点とした推論によって生まれる種類の思考や呼び起こされる感覚・感情との関係についての普通の表現についてはなされない誤解が、従来の隠喩論では当然あるべきもの、すなわち「隠喩的意味」として受け取られていたため、議論が混乱していたのである。様々な信念や話し手の意図などを解釈に織り込み、ある感情が喚起されたとしても、それらは表現の意味そのものではなく、その意味によって呼び起こされるものである。表現そのものの解釈と、表現を始発点とする様々な「呼び起こし」との区別を意識しなければならない。

隠喩による「呼び起こし」に関しては、辻(2002)が隠喩の解釈に特殊な認知過程を設定せず会話の含み(conversational implicature)という概念を用いて詳細に検討している。本研究では、経過理論の形成における「呼び起こし」は、XをYと見なすような合理的な理由を探し出す過程で行われていると考える。その一つの方法として挙げられるのが山梨(1988)や Glucksberg & Keyser(1990), Glucksberg(2001)で提案されているようなYに特有あるいは典型的な属性をXに付与すること(彼を狼と見なすために、狼のような〈獰猛さ〉を彼に付与する)であり、従来の隠喩論で「隠喩的意味」として関心の対象となっていたものである。ただその場で個別の話し手をよりよく理解するために形成されるという経過理論の性格上、その呼び起こしは意味論的に予測されるものではなく、理論自体が試行錯誤を経て常に更新されるため際限がないのではないだろうか。

現在語用論でもっとも強い影響力を持つ理論の一つである Sperber & Wilson(1986)の「関連性理論」は、その「呼び起こし」の範囲にある程度の枠を与えることができる理論として注目される。発話者の「意図」の理解とコミュニケーションの成功が目的の一つとしてある以上、特に会話では呼び起こしは無限に試みられることはないし、「自分勝手」な解釈もしない。関連性理論は、コミュニケーションにおいて聞き手が話し手の意図についての解釈を構築する一般的な「仕組み」を基に隠喩を扱う。関連性理論によれば、発話の解釈は関連性の原理に基づいて行われ、関連性の大きさは解釈に要する労力と解釈から得られる文脈効果によって決定される。隠喩は彼らの言う「緩い発話(loose talk)」(町田市に住んでいる人が住んでいるところを聞かれて「東京です」と答えるような場合の発話)の一種としている。関連性理論は、聞き手の解釈の手順を一般化することを目指しているが、労力と文脈効果の「計算」について非表象的なプロセスを経ることを認めており、発話の解釈の具体的な内容を定めることはできない。関連性理論では隠喩によって呼び起こされるのは「弱い推意の束」とされ⁴、労力と文脈効果との兼ね合いにより、その範囲をある程度定めるような仕組み(enrichment, loosening)を提示しているという点で興味深いと言えよう⁵。

いずれにしてもこれらの「呼び起こされるもの」は先行研究が追求してきたような表現と一対一に対応する「隠喩的意味」ではない。

我々が言葉を用いて為しうる行為が無限であるのと同じように、隠喩によって為しうることは無限である。その全てを記述することはできないし、それゆえ定式化することはできそうにならない。例えば「彼は狼だ」と発話することで、警告や忠告、周りを笑わせること、「彼」への戒めなど様々なことを呼び起こしうる。そこには感情のように命題的でないものも多分に含まれる可能性がある。したがって、隠喩の解釈の問題は、その意味の解釈の問題ではなく、隠喩の発話という行為の解釈の問題となる。なぜその行為をしたか、その発話で何をしようとしているのかをあらゆる手段を用いて解釈者は探ることになる。

4.2. 隠喩と直喩

隠喩において経験的に異なる分類がなされている X と結びつけられる Y は、そのコンテキストにとっては「異質」の対象である。異質のものがコンテキストに持ち込まれるとき、刺激が生まれ、「面白さ」が感じられる。この効果は Lausberg(1963)によって「異化効果」(邦訳:63)⁶と呼ばれているものの一つであろう。このような効果は「XはYのようである(に似ている)」を基本形式とする直喩にも見られる。(2)の例文において、a は直喩であり b は隠喩である。

(2) a. イラクはハイジャックされた飛行機のようなのだ。⁷

b. イラクはハイジャックされた飛行機だ。

隠喩の基本形式「XはYである」に「よう(な)」等を挿入すれば、直喩の形式「XはYのようだ」になることから、隠喩はしばしば直喩と比較される。Black(1962)によって「比較説」と呼ばれた立場では、隠喩は直喩から「ようだ(な)」を取り去った表現であるとされ、隠喩の意味は対応する直喩と同じで X と Y との類似性を表しているとされる。隠喩においては結び付けられ

る2つの対象、「男は狼だ」であれば、男と狼が比較され、直喩と同じように男と狼の類似性を表わしているのだとする主張である。そして聞き手がすべきことは、男と狼の類似点を見つけ出すことである。Davidson(1978)も「隠喩は、対応する直喩が示唆する類似とは同一のものではないにしろ、やはり同様の類似へ我々の関心を導く」(邦訳:59)と述べる。

確かに、言語形式以外に両者の違いを指摘することは困難である。先に述べた立場からは、発話の字義から呼び起こされるものを定めることは困難であり、直喩と隠喩のその点での厳密な違いを述べることも不可能である。実際喚起されているものにそれほど違いがあるようには思えない。しかし、本研究では野内(2002)も指摘しているように、直喩と隠喩との認識論的な違いよりも表現論的な違いに注目する。結論から先に述べれば、隠喩と直喩では、その発話を理解するために要求する聞き手の関与の程度が異なるのである。

直喩と隠喩について一つ確実に言えるのは、その発話の形式が異なるということである。隠喩では「XはYである」と言い、直喩では「XはYのようである」と言う。したがって、隠喩に意味を与えるには、「XはYである」が真となるような条件を探し出し、直喩に意味を与えるには「XはYのようである」が真となるような条件を探し出さなければならない。

一般に、ある2つの対象を比較するとき、1つの類似点が発見されさえすれば、双方が経験的にどのような分類をなされているにしろ、2つの対象は類似している、すなわちXはYのようであると言うことができる。例えば「リンゴは梨のようである」という文は「丸い」という類似点を見つけ出せば真となる。つまり、XとYとの間に1つでも類似点を見つけることができればその発話の真理条件は満たされるのである。このことは直喩にも当てはまる。すなわち、直喩の文を真とするためには類似点を1つでも見つけ出せばよいのである。もちろん複数の類似点を見つけ出してもよい。内山・杉本(2002:76)が指摘するように「直喩が求めるのは意味内容の具体化に過ぎない。直喩ではいくつかの類似性を挙げればそれでよい」のである。もちろん話し手が意図していなかった類似点も見つかることもあるだろうが、それでもXとYとが「似ている」ことには変わりがないため、その直喩の解釈は妥当である。

それに対して、隠喩において〈XはYではない〉ことが参与者双方にとって明白であるにもかかわらず「XはYである」を真とするような条件は、XとYとの間に一つ類似点が見つかった程度では満たされない。XがYではないことが明白であるのに「XはYである」と言うことは、聞き手がXをYと見なすよう仕向けることになる。例えば、形が似ているからといって「リンゴは梨である」ということは明らかに合理的でない。むしろ果物の種類についての勘違いとして受け取られる可能性が高い。話し手は聞き手の言語においてもそれが不合理であると見なすのならば、色や形など1点のみについての類似を陳述するためだけに同定の形式を使わない。

隠喩「XはYである」を受け取った聞き手は(話し手が)XをYと見なすに足る合理的な理由を探ろうとする。それは直喩のように類似点を1つでも見つければ満たされるというものではなく、話し手の意図や信念を理解するに十分な程度に達するまで試みるだろう。

このように、発話の言語形式が異なる直喩と隠喩とは、それぞれが要求する真理条件が異なるのである。結果的に導き出されるものにほとんど違いを見出すことができないとしても、その字

義により聞き手に要求する関与の大きさが異なるのである。

野内(2002)は直喩と隠喩との違いについて、前者が説明的であるのに対して後者が主張あるいは説得であるとしている。確かに(2)では隠喩の形式bの方がより強い主張をしており、読み手は「イラクはハイジャックされた飛行機である」のさらなる合理的な解釈を探すことを求められるように感じられる。その要求は「イラク」を「ハイジャックされた飛行機」と「見なすよう仕向ける」という隠喩の機能によるものである。

隠喩の解釈においては、XをYと見なすがゆえにXはYと似ていることになる。XをYと見なすよう仕向けることに成功したならば、結果として聞き手の目は類似に向きやすいというだけである。Yであると述べられるXがYと何らかの点で類似することになるのは当然だろう。この点で直喩と混同されやすいのである。

以上の考察から、実際の言語使用における両表現の違いは、形式の違いから導き出されることが分かる。端的に言えば、直喩はXとYとが似ていることを述べており、隠喩はXはYであることを述べている。言い換えれば、直喩はXとYとの間に類似しているという関係をつくり出すよう仕向けられるのに対して、隠喩は聞き手にXをYと見なすよう仕向けることになるという点で両表現は明確に異なるのである。

4.3. 談話における隠喩の相互理解

本節では、実際の会話で用いられている隠喩を観察し、隠喩の解釈と上で述べた「XをYと見なすよう仕向ける」という隠喩の機能及びコミュニケーションの相互理解という三者間の関わりを具体的に示す。まず、隠喩が用いられている会話例⁸を以下に示す。

(3) バラエティ番組における会話⁹

K：僕は二人のことは気にかけてたんですよ

I：はい

H：はい

I：でもさっき過去形やった¹⁰のはどういうことなんですか

H：そうそう

K：なんかバスに乗り遅れたんちゃうかなって気がする。

H：あ、バスに乗り遅れた

I：あーっ、(Hの方を指して)自分な。

(笑い)

H：やらしいやつやな

K：大丈夫かなと思って

I：あ、僕は……

K：最近ね、さんまちゃんが一人勝ちで、その下ぐらいはダウントウン、それがもうナイティナインからロンドンブーツから爆笑問題に移ってるでしょ

I：いってますね

K：君らどの辺のバスに乗ってるの

I：僕らね、横のね、違うバスに乗ってるんですよ。(笑い) 違うバスにね

S：こいつらね、Iがリヤカーみたいに(リヤカーのジェスチュア)が一っと引っ張るとんねん、一生懸命必死になってぜーぜーいいながら。

I：僕もね、あーもういっちゃうんや思って(手でおいて行かれるジェスチュア)、でもまだ视界には

日常会話では、このように参加者の一人によって用いられた隠喩を他の参加者が「維持・拡張」している場面がしばしば見られる。参加者は相互に隠喩を用いることによって何をしているのだろうか。

発話を受け取ることによって形成された解釈理論は、経験的な証拠によって検証されうるものである。つまり、聞き手は自分が発話に付与した意味や話し手の意図の理解が正しいものであるかどうか確かめる。その検証はどのような証拠によって行われるのだろうか。

Coulter(1987)が指摘するように、一般に「社会的相互行為のもっとも通常の実際的なコンテキストにおいては、行為や発話の理解が達成されるとき、いちいち、理解したことを宣言したり、その宣言を吟味し確かめるなどということをしたり」せず、「理解は、その時々コンテキストに応じて様々に、その時々の実際の目的に適ったかたちで、ふるまいにおいて達成され表示される」(邦訳:80)。つまり、合意や理論の一致に達していることを観察することが可能なのは、相手が見せてくれる言語使用を含んだ振る舞いを通してのみである。

それは隠喩の解釈においても同様である。実際のコミュニケーションにおいて、隠喩を理解していることは、理解していると判断されるような振る舞いが出来ることと同義である。そして参加者が当該の対象をその状況において正しく「理解している」かどうかは、あくまで共同体の成員、つまり会話の他の参加者の判断を得て知られる。

先に述べたようにコミュニケーションの最終的な目的が何であれ、コミュニケーションが成功するためには参加者相互間で必要な程度理解が成立していなければならない。理解が成立しているためには互いの「言語」が最大限一致している必要がある。「言語」が一致しているという感覚は、同じ言葉を同じ使い方をしていることから得られる。したがってコミュニケーションの参加者は、コミュニケーションを成立させるために互いの用いている言語の「ずれ」を最小にするよう努力するのである。

先に述べたように、隠喩は通常の用法からの「ずれ」を持つ言語の使用である。標準的な言語の使い方のみで進行しているコンテキストでは、参加者間相互で共有を想定して相互行為を行っている。しかし、参加者の一方によって標準的な使い方からの「ずれ」をもつ発話がなされた場合、それは双方にとって明らかに共有されていない「言語」理論が必要となる。にもかかわらず、コミュニケーションを成功させようとするならば、すなわち互いを理解しようとするならば、その場で互いを理解するための「理論」を形成する必要が生じる。

その理論の形成において、その発話の「ずれ」を最小限にし、互いの理解を一致させるための選択肢は、「ずれ」をできるだけ「標準」に引き戻すことと「ずれ」を「標準」としてしまうことの2つである。その「ずれ」が聞き手の信念において明らかに単純な勘違いや誤解（例えば「クジラは魚だ」）であれば、「標準」に戻す、つまり訂正や注意などの努力をし理論を一致させようとするだろう。だが勘違いや間違いの明白な根拠もなく、話し手が合理的な態度でその発話をしていると見なされる場合、寛容の原則に従ってその発話が真になるような条件を探す。

「ずれ」を持つ理論が話し手の理論と必要な程度に一致しているかどうかを確かめるには、自分が形成した理論に従った意味が字義となるような発話をすればよい。その発話に対する相手の反応によって自らが形成した理論がどの程度相手のものと一致しているかが検証されるのである。

このように考えるならば、隠喩に対して話し手を理解するために形成した解釈理論に沿った隠喩を用いて反応することは、相互行為の過程で「ずれ」を「ずれ」でなくする努力をすることであり、「ずれ」があったはずの言語理論をそのコンテキストにおける標準的な理論とすることになる。

この点に関連して坂部(1989)は次のように述べる。

二つの言語的ないし言語学的要素（たとえば二つの語）を関係づけることによって、これまで知られていなかったひとつの関係構造の場を形成することを通して、ひとは、そこで、たんに既成の系列を顕在化せしめるというよりは、むしろ、あらたな系列ないしあらたな範列を創り出す。

(坂部 1989:138)

上の(3)の会話例では、冗談を言い合っているだけのようにも見えるが、連想的な関係にある語を使用して会話を展開することは、隠喩の言い換えをせずに、つまり隠喩を「そのまま」受け取って互いの「理論」をつくりあげていくことにもなる。

隠喩（「IとHはバスに乗り遅れた」）が発話された後に、参加者は「バスに乗り遅れる」と連想的な関係にある語を使用している（例えば「違うバスに乗っている」「リヤカーを引っ張っている」）。このような一貫性をもつ隠喩を用いたやりとりでは、隠喩が出てくる度に新たに解釈をし直すというよりも、「IとHの状況は〈バスに乗り遅れている〉である」ことを字義とするような理論をつくり、その理論において合理性を維持しながら会話を展開しているといった方が適当である。(3)の例で言えば「IとHの状況は〈バスに乗り遅れている〉である」をきっかけとして、以降の隠喩混じりの発話はその場においては「正常な」意味、言い換えれば字義通りの意味を持つものとして互いの言語理論が形成されているのである。つまり、その場においては、全ての隠喩が当該の状況についての「字義通り」の使用である。そして、そのような発話をする事とそれ自体が自らの形成した理論の検証となっているのである。

以上のような日常的な会話における隠喩を用いたやりとりは、参加者間のみで通じる「言語」

を形成しているという点で、結果的にCohen(1979)が指摘しているような「親密さの育成」(cultivation of intimacy)に貢献している可能性もある。

5. まとめ

本研究では、まず言語規則の完全な共有を前提とした言語観では隠喩の意味やその解釈を明らかにすることはできないことを論じた。そしてDavidsonの言語によるコミュニケーションについての素描を基に、隠喩は字義通りの意味を表すことを論じた。

Davidsonの意味理論やコミュニケーション観は意味の理解を保証しながらも、その意味から呼び起こされるものの豊かさを限定せず、しかもコミュニケーションが成り立つ仕組みを示唆しているという点で、隠喩論に貢献する。

そして隠喩が字義通りの意味を付与することを要求するがゆえに、XがYであるような局所的な理論を形成させることになる。したがって、コミュニケーションにおける隠喩の機能はXをYと見なすよう仕向けることである。

ことばの一つの使い方である隠喩は、コミュニケーションで何かをするために使われるのであり、その意味は行為を行うための出発点でしかない。意味に関する問題を解消し、隠喩の発話という行為の解釈に注目するということは、隠喩によって何を為しうるかというレトリックの問題に立ち戻ることになる。

先行研究ではその違いが明確でなかった隠喩と直喩とは、発話の形式が異なるため異なる真理条件を必要とする。そして、それゆえ両表現には表現論的な違いが生じる。今後更に談話資料の分析を通して直喩と隠喩の用いられ方の違いを検討していくことが必要であろう。

また、従来ほとんど触れられることがなかった会話における隠喩の使用について、参与者相互で隠喩を用いることは隠喩の解釈理論の調整・検証をすることであり、それによってその場での字義を与える言語理論が形成されることを示した。

本研究は従来の言語研究における隠喩論とは異なり、「隠喩の意味」という仮構を必要としない隠喩論であるという点で意義を持つ。さらに本研究では主に隠喩を対象として考察したが、隠喩に限らず発話の解釈において標準的な規則の存在を前提とするという見方に対して再考を促すものである。

注

- 1 本研究では「XはYである」を隠喩の基本形式として、以降の議論ではたとえられる対象をX、たとえるのに用いられる対象をYと呼ぶ。
- 2 「根元的解釈」は互いの言語や文化的背景などを全く知らない相手(例えば外国人同士)の言うことを、どのようにして理解するかという問題設定からつくられた解釈モデルである。
- 3 隠喩が隠喩であることを気づかせる特性、いわゆる「隠喩性」については杉本(2001)も参照。
- 4 Pilkington(2000:100)は「隠喩は複雑(complex)な思考を伝えるための便利で経済的な方法」(引用者訳)と述べている。だが、話し手も予測しないような弱い推意が際限なく生まれる可能性があるならば、それは「経済的」なのだろうか。

- 5 ただし、「弱い推意」の多さと詩的效果との関係については慎重な議論が必要だろう。先に述べたように隠喩でない表現からも「弱い推意」らしきものが大量に導き出されるとも言えるのであり、推意が詩的效果に関連しているとするならば、その推意の「質」の面から隠喩でない表現と比べられる必要があろう。そのためにはそれぞれの推意を同定できなければならないが、その方法は現在に至る研究においては得られていない。
- 6 「異化効果とは、外界の現象として予期していなかったものが、人の心の中に及ぼす心的な影響のことである。その影響は心的な衝撃・ショック choc として様々な種類と程度において現れる」(Lausberg 1963, 邦訳:63)。
- 7 朝日新聞「天声人語」(2003年4月9日付)より。この一文の後に「行き先は知らされていない。大統領になってほしいとは誰も思わなかった男がパイロットに銃を突きつけて脅している。乗客や乗員は怖くて「やめろ」とはいえない。英国はといえば、ハイジャック犯に武器や弾薬を提供して事態を悪化させてきた。」という説明が続く。
- 8 談話全体を見ればアレゴリーや寓喩ともとれるが、ここではその時間軸上の位置における個別の発話による行為に注目するという点で、隠喩のやりとりとして分析する。
- 9 日本テレビ『いろもん』2000年3月31日放送分を執筆者が文字化した資料。
- 10 少し前の会話でIがKに「好きだった」と言われたことを指している。

参考文献

- 内山和也・杉本巧(2002)「隠喩が意味を失うとき」『広島大学日本語教育研究』12, 75-82, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座。
- 坂部恵(1989)『鏡のなかの日本語：その思考の種々相』筑摩書房。
- 杉本巧(2001)「『隠喩性』について」『広島大学日本語教育研究』11, 95-102, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座。
- 滝浦静雄(1988)『メタファーの現象学』世界書院。
- 辻大介(2002)「メタファは文字通りのことを意味する」『日本認知言語学会論文集』2, 276-279, 日本認知言語学会。
- 戸田山和久(2002)「真理条件的意味論と検証条件的意味論」野本和幸・山田友幸編『言語哲学を学ぶ人のために』104-121, 世界思想社。
- 野内良三(2002)『レトリック入門：修辭と論証』世界思想社。
- 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士編(1998)『岩波哲学・思想事典』岩波書店。
- 森本浩一(1987)「隠喩とコミュニケーション—デリダとデイビッドソンの場合—」『現代思想』15(6), 90-104, 青土社。
- 森本浩一(1989)「他者を理解する技倆—再度「コミュニケーション」について—」『現代思想』17(3), 130-142, 青土社。
- 森本浩一(2002)「アドホックな概念・非命題的なもの・弱い推意—隠喩論は何を明らかにしなければならないか—」『東北大学文学研究科研究年報』51, 288-258, 東北大学文学研究科。
- 山梨正明(1988)『比喩と理解』東京大学出版会。
- Black, M. (1962) *Metaphor, Models and metaphors: Studies in language and philosophy*, 25-47, Ithaca, NY: Cornell University Press. (邦訳：尼ヶ崎彬訳(1986)「隠喩」佐々木健一編『創造のレトリック』2-29, 勁草書房)。

- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the theory of syntax*, Cambridge: M.I.T. Press. (邦訳：安井稔訳(1970)『文法理論の諸相』研究社).
- Cohen, T. (1979) Metaphor and the cultivation of intimacy, In S. Sacks (ed.) *On metaphor*, 1–10, Chicago: University of Chicago Press.
- Coulter, J. (1987) *The social construction of mind: Studies in ethnomethodology and linguistic philosophy*, London: Macmillan. (邦訳：西阪仰訳(1998)『心の社会的構成：ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社).
- Davidson, D. (1978) What metaphors mean, *Critical Inquiry* 5, 31–47. (邦訳：高頭直樹訳(1987)「隠喩は何を意味するのか」『現代思想』15(6), 49–69, 青土社).
- Davidson, D. (1984) *Inquiries into truth and interpretation*, Oxford: Clarendon Press. (邦訳：野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳(1991)『真理と解釈』勁草書房).
- Davidson, D. (1986) A nice derangement of epitaphs, In E. Lepore (ed.) *Truth and interpretation: Perspectives on the philosophy of Donald Davidson*, 433–446, New York: Blackwell.
- Evnine, S. (1991) *Donald Davidson (Key contemporary thinkers)*, Stanford, CA: Stanford University Press. (邦訳：宮島昭二訳(1996)『デイヴィドソン：行為と言語の哲学』勁草書房).
- Glucksberg, S. (2001) *Understanding figurative language: From metaphors to idioms*, Oxford: Oxford University Press.
- Glucksberg, S. & B. Keysar (1990) Understanding metaphorical comparison: Beyond similarity, *Psychological Review* 97, 3–18.
- Handelman, S. A. (1982) *The slayers of Moses: The emergence of rabbinic interpretation in modern literary theory*, Albany: State University of New York Press. (邦訳：山形和美訳(1987)『誰がモーセを殺したか：現代文学理論におけるラビ的解釈の出現』法政大学出版社).
- Lausberg, H. (1963) *Elemente der literarischen rhetorik*, München: Max Hueber Verlag. (邦訳：萬澤正美訳(2001)『文学修辞学：文学作品のレトリック分析』東京都立大学出版会).
- Perelman, Ch. (1977) *L'empire rhétorique: Rhétorique et argumentation*, Paris: Librairie Philosophique J. VRIN. (邦訳：三輪正訳(1980)『説得の論理学 新しいレトリック』理想社).
- Pilkington, A. (2000) *Poetic effects: A relevance theory perspective*, Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Richards, I. A. (1936) *The philosophy of rhetoric*, London: Oxford University Press. (邦訳：石橋幸太郎訳(1961)『新修辞学原論』南雲堂).
- Ricœur, P. (1972) La méthode et le problème central de l'hermeneutique, *Revue Philosophique Louvain* 70, 93–112. (邦訳：清水誠訳「隠喩と解釈学の中心問題」久米博・清水誠・久重忠夫編訳(1985)『解釈の革新』84–111, 白水社).
- Searle, J. R. (1979) Metaphor, A. Ortony (ed.) *Metaphor and thought*, 92–123, New York: Cambridge University Press. (邦訳：渡辺裕訳「隠喩」佐々木健一編(1986)『創造のレトリック』勁草書房).
- Sperber, D. & D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and cognition*, Oxford: Blackwell. (邦訳：内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳(1993)『関連性理論：伝達と認知』研究社出版).

用例出典

朝日新聞社『Digital News Archives』天声人語 2003.4.9.

日本テレビ『いろもん』2000年3月31日放送分.

(投稿受理日：2003年5月21日)

(改稿受理日：2004年6月4日)

杉本 巧 (すぎもと たくみ)

広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座

739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1 A104

takumi@hiroshima-u.ac.jp

What does a metaphor mean and perform?

SUGIMOTO Takumi
(Hiroshima University)

Keywords

metaphor, communication, literal meaning, rules, agreement

Abstract

Although many arguments have continued about what metaphor expresses and the procedures that elicit “metaphorical meanings,” they have not yet reached a decisive conclusion. One of the causes of confusion is the persistence in scientifically clarifying the “special” meaning of metaphor. In this research, the theories of metaphor based on the “shared rules” of interpretation are criticized first. Then, based on Donald Davidson’s statements about the meaning of metaphor and mutual understanding, this paper shows that metaphors mean literal meaning. The literal meanings are assigned in accordance with the unprepared interpretation theory that is formulated on the scene. A metaphor that is one usage of language is used in order to perform a communication. The meaning cannot but be a starting point for performing an act. The function of metaphor in communication is leading the hearer to see X as Y, and the interpretation evoked from the literal meaning cannot be formulated. Furthermore, the language used in everyday discourse is mentioned as an example in which the function of metaphor is reflected.